

令和 5 年 4 月 25 日現在

機関番号：24301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00255

研究課題名（和文）祇園祭の鷹山を事例とした祭礼文化継承発展のための複合的芸術表現

研究課題名（英文）Multiple Artistic Expressions for the Succession and Development of Festival Culture: The Takayama of the Gion Festival as a Case Study

研究代表者

滝口 洋子 (Takiguchi, Yoko)

京都市立芸術大学・美術学部 / 美術研究科・教授

研究者番号：70336725

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：京都の祇園祭はユネスコの無形文化遺産となっている。その曳き山（山車）の一つである鷹山は江戸時代に大半が損壊し、申請時には鷹山を復興させる計画が進行していた。本研究では、鷹山が京都市内の巡行に復帰する際に用いる衣裳（浴衣・帯など）・小物類（扇子など）・裾幕（山車の一番下に用いる幕）等に関して理論的研究を行い、それらに基づいてデザイン制作を行った。2022年の夏、約200年ぶりに鷹山は祇園祭の巡行に復帰したが、この際に鷹山は本研究の成果である衣裳や裾幕等を実際に用いて都大路を練り歩いた。実際の祭礼の場において披露された本研究の表現は、祭礼文化の継承と発展の今日的在り方の一つを提示することとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は今まで見落とされて来た祇園祭の衣裳や裾幕に初めて学術的な光をあて、理論と制作を連動させて祭礼文化の継承発展を促すものである。服飾デザイン・染色・日本画・美術工芸史の方法論を組み合わせることで学際的創造性を追求するところに、本研究の独自性がある。平安時代から続く祇園祭は日本の祭礼の根幹の一つで、祇園祭に用いられる衣裳や道具類は、日本各地の祭礼品の規範となってきた。200年ぶりに巡行に復帰した鷹山に対する注目度は、ことのほか高い。巡行復帰に用いられた鷹山の衣裳や裾幕、そして祭礼文化継承の在り方は、今後の各地の祭礼に対して強い波及効果を有している。

研究成果の概要（英文）：Gion Festival in Kyoto is registered as the UNESCO Intangible Cultural Heritage. One of its floats, Takayama, was damaged in the Edo period, and at the time of the application, the plan was underway to restore Takayama float. In the summer of 2022, Takayama float returned to the Gion Festival for the first time in 200 years. Takayama actually used the costumes and the hangings designed by this research project, and paraded through the main streets in Kyoto. The artistic expressions, created by this design project, were shown to the people through this actual festival, and one of the contemporary ways of succession and development of the festival culture was presented.

研究分野：デザイン

キーワード：祇園祭 祭礼 デザイン 浴衣 衣裳 幕 鷹山

1 研究開始当初の背景

研究代表者と分担者は2014年に祇園祭の大船鉦の復興に関わり、音頭取り（曳き山を曳く人々に合図を出す係）の衣装や、裾幕（曳き山の一番下に用いる幕）をデザインした。そして、大船鉦に続いて鷹山が祇園祭の巡行に復帰することになった。大船鉦の経験の結果、研究の代表者や分担者の専門知識に加えて、染織技法に関する知識や日本絵画に関わる知見があると、さらに高度な制作が実現できることが判明した。

そのため鷹山に関しては研究者チームを結成し、研究代表者の専門の服飾デザイン、分担者の専門の染織史に加え、染色と日本画の実技を専門とする2名の研究協力者を加えたチームを作った。鷹山保存会と協議した結果、鷹山のすべての衣裳（曳き手・囃子方・音頭取り・車方・屋根方）・小物類・裾幕の研究制作を、この研究チームが担当することになった。

2017年に曳き手（曳き山を曳く人）の衣裳、2018年に囃子方（囃子を奏でる人）の衣裳を研究制作した。科学研究費の交付金による研究は、すでに進捗しつつあったこのプロジェクトのうち、2019年から2022年度の研究にあたるものである。

2 研究の目的

京都の祇園祭はユネスコの無形文化遺産に登録されている。その曳山の一つである鷹山は江戸時代にその大半が損壊した。研究当初はこの鷹山を復興させる計画が進行中であった。本研究は鷹山が京都市内の巡行に復帰するために用いる衣装（法被、浴衣、帯など）、小物類（扇子など）、裾幕などに関して理論的研究を行い、それらに基づいてデザイン制作を行うものである。本研究では、服飾デザイン、染色、日本画、美術工芸史の理論と実践を組み合わせ、領域横断的な芸術の在り方の可能性を探ってゆく。試作された品々が鷹山の巡行に用いられ、祭礼の場における複合的表現を通して祭礼文化の継承と発展の今日的あり方を社会に提示することを、本研究は目指している。

3 研究の方法

研究チームは、研究代表者の滝口洋子（京都市立芸術大学教授）、研究分担者の吉田雅子（京都市立芸術大学教授）、研究協力者の日下部雅生（京都市立芸術大学教授）・川嶋渉（京都市立芸術大学教授）、山田純司（鷹山保存会理事長）を主たるメンバーとするもので、研究内容は理論研究と実践研究に大別することができる。

理論研究は、研究分担者の吉田（工芸史専門）が中心となり、一次文献や絵画史料を用いて、鷹山を中心とする祇園祭の衣裳と裾幕の歴史的事例を調査した。また、実際に祇園祭に赴いて、現在使用されている事例の調査を行った。

実践研究は、研究代表者の滝口（服飾デザイン専門）が中心となり、研究協力者の日下部（染色専門）、川嶋（日本画専門）とともに、以下の手順で制作を行った。まず、理論研究から導き出された結果に基づいて、年度ごとに対象アイテムのデザインを考え、鷹山保存会に提案した。鷹山保存会は、提案されたデザインの中から実施案を選定した。研究チームは選定された実施案

にもとづいて、京都の職人と共同しながら衣裳や裾幕のデザイン・モデルを制作した。

祭礼の継承と発展には、その将来を担う次の世代を育成することが極めて重要であるため、これらの理論・実践研究には、京都市立芸術大学の学部や修士の学生も参加した。

4 研究成果

本研究は当初 3 年間で予定していたが、コロナウイルスの流行により期間を延長して 4 年間となった。最初の 3 年間は研究と制作を行い、最後の 1 年は研究成果をとりまとめた。

2019 年度

2019 年度は、音頭取りと車方（曳き山の進行を制御する係）の衣裳などの調査と制作を行った。調査の結果、以下が判明した。音頭取りは多くの曳き手を束ねて巡行の合図を送る係であるため、その浴衣には人目につきやすい大胆なデザインが用いられる。曳山を象徴する主題をモチーフとし、モチーフをリピートすることはあまりない。色彩は、白と紺の組み合わせが多い。

車方は車輪の操作を行う専門職で、その法被に用いられるモチーフは、車輪に関するものが多い。油にまみれることもあるため、地色は濃色が多い。現在はこの傾向から外れたものもかなりあるが、それはいたずらに華やかさや面白さを求めることに終始する傾向がある。

本研究では以上の特徴を踏まえつつ、鷹山を象徴するモチーフを組み込み、音頭取りと車方が果たす役割を衣裳を通して視覚化するとともに、これらの人々が鷹山に所属していることが一目でわかるデザインを制作した。

具体的には、音頭取りの衣裳の前面に飛翔する鷹、背面にその羽先と鷹山の文字を大きく配した。地色は紺色、文様は白で、遠方からも視認できるようにした。車方の法被は、前面に車輪の一部、背面に 3 つの車輪の本体と円形の鷹山の紋を配した。地色は紺で、文様は白上がりである。紙に描かれたデザインでは不十分であるため、実際の材質を用いてこれらのデザインの現物モデルを、鷹山保存会とともに制作した。

2020 年度

当初の計画では、2020 年度は裾幕のデザインを行う予定であったが、コロナが流行してこれが難しくなった。この種のデザイン制作は、研究者と祇園祭の鷹山保存会や学生などの緊密な連携が不可欠である。学生と、研究者である教員とは、遠隔授業などを通じて連携することも不可能ではなかった。だが、コロナの流行当初は、保存会の方々にそのような設備がなく、連携することが大変困難な状況にあった。そこで、複雑な連携が必要な裾幕のデザインは翌年に延期し、2020 年度は祭礼に用いる小物類などに方向を切り替えて、祭礼文化の継承のためのデザインを考えた。

調査の結果、山鉾に関連する様々な小物のアイテムが、祇園祭の宵山で用いられていることが判明した。それらを念頭におきながら、複数のデザイン案を考えた。その中から、以下のアイテムに関するデザイン案が、鷹山保存会によって選出された。鷹山の立版古（紙製のミニチュア・

モデル)、Tシャツ、飲料、ペンライト、マスク、箸置き等。さらにこれらのデザインを詳細に検討した結果、鷹山の立版古、Tシャツ、マスク、箸置きのデザインが選出され、これらのデザイン・モデルの制作を行った。

なお、コロナによって展示が後ろ倒しとなっていた2019年度デザインの音頭取りと車方の衣装、及び2020年度デザインの小物類は、2021年度に京都市内の祇園祭ギャラリーにおいて展示され、一般に公開された。

2021年度

2021年度はまだコロナが蔓延していたが、裾幕のデザインを行った。鷹山は2022年夏に巡行に復帰することを目指しており、本年に裾幕のデザインを行わなければ間に合わないからである。そこで、コロナの合間をかいくぐるようにして、リモートを駆使しながら裾幕のデザインを実施した。

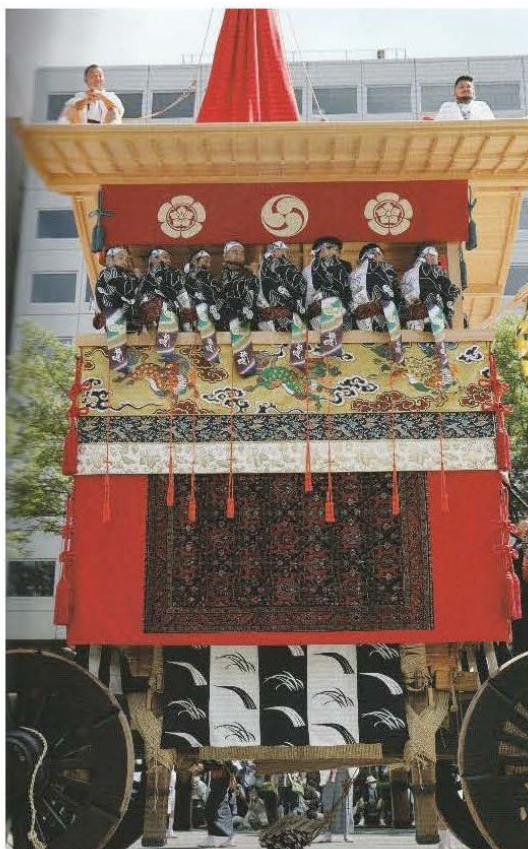
まず、鷹山の裾幕の一次資料、絵画資料、現存作例の調査を行い、その特徴や傾向を導き出した。そしてその結果に基づいて、複数のデザイン案を考えた。鷹山保存会にリモートでプレゼンテーションを2度行い、保存会の意見をくみ取りながらデザイン案を修正した。修正されたデザインの中から、保存会は最終的に1点のデザイン案を選出した。しかし、この案はまだ実現化に向けていくつかの問題点があった。そこで、京都の地場の職人などと相談しながら、さらなる修正を行って最終デザインを創り上げ、そのデザイン・モデルを完成させた。

2022年度

最終年度となった2022年度には、コロナの合間をぬって、祇園祭が2年ぶりに開催された。ここにおいて鷹山は約200年ぶりに、山鉦巡行への復帰を果たした。この巡行において、鷹山はこの研究チームがデザインしてきた衣装や裾幕などを用いて、都大路を練り歩いた。

この2022年度は、巡行時の衣装や裾幕の状況写真を撮影し、今まで行ってきた鷹山のデザインをとりまとめた。本研究は一般の人々が多数参加する祭礼に関するものなので、一部の研究者に向けた学術報告書ではなく、一般の人々にわかりやすい、ビジュアルを豊富に用いた報告書を作成した。

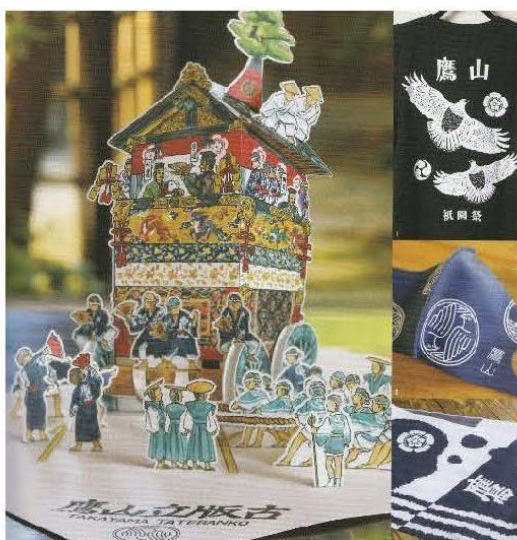
この報告書では、鷹山のデザインに関連する一連の研究を、第一段階の史料調査から、現状のデザイン分析、デザイン出し、及び最終デザインの修正までの全てのプロセスに渡って、視覚的資料を豊富に用いてわかりやすく解説した。そして鷹山が約200年ぶりに巡行復帰を果たした際に、これらの品々が祭礼の中でどのように用いられたかを記録した写真を多数掲載した。



裾幕を掛けて巡行する鷹山



鷹山の音頭取りと車方の衣裳



鷹山の小物

(立版古、Tシャツ、マスク、手ぬぐい)



鷹山の小物(箸置き、Tシャツ、タオル、粽)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 滝口洋子、吉田雅子、日下部雅生、川嶋渉	4. 巻 No.64
2. 論文標題 祇園祭の鷹山復興プロジェクト3 - 音頭取りと車方の衣裳のデザイン	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都市立芸術大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 109~114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 滝口洋子、吉田雅子、日下部雅生、川嶋渉	4. 巻 66
2. 論文標題 祇園祭の鷹山の復興プロジェクト4- 裾幕のデザイン	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都市立芸術大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 155-166
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 植木行宣、木村幾次郎、仲林亨、福井藤次郎、八木透、山路興造、吉川忠男、吉田孝次郎、吉田雅子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 淡交社	5. 総ページ数 25
3. 書名 祇園祭 温故知新	

1. 著者名 滝口洋子、吉田雅子、日下部雅生、川嶋渉 (監修)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 京都市立芸術大学	5. 総ページ数 49
3. 書名 祇園祭鷹山の衣裳と裾幕のデザイン (本プロジェクトの一般向報告書)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究の成果は、京都市立芸術大学の研究紀要において公開されただけでなく、京都市の中心部にある「祇園祭ギャラリー」において、衣裳や小物などのデザイン画や実物モデルが順次展示された。また、最終年度に制作した一般向けの報告書は、祇園祭の鷹山保存会を通して一般の方々に配布されたり、祇園祭ギャラリーにおいて随時配布されている。そして、そのPDF版は、京都市立芸術大学のリポジトリでも公開する予定である。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	吉田 雅子 (Yoshida Masako) (40405238)	京都市立芸術大学・美術学部 / 美術研究科・教授 (24301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関